

博士学位論文請求論文要旨

論文題名 大学生における社会観の特徴と形成要因
——青年期発達と時代背景の視点から——

提出者 峰尾 菜生子（中央大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程6年）

論文の要旨

1. 論文の主題および当該研究分野における位置づけ

1-1. 論文の主題

本研究の主題は、大学生が現在の日本社会に対してどのような社会観をもっているのか、およびどのような要因が大学生の社会観の形成にかかわっているのかを検討することであった。本研究でいう社会観とは、「自分が生活している、政治、経済、文化などの諸制度の複合した包括的統合体としての社会に対する認知的評価」を意味する。

本研究では、具体的な研究課題として以下の3点を検討した。第一の課題は、大学生の社会観の特徴を明らかにすることである。この課題は、大学生の社会観の全体的傾向を把握するものである。第二の課題は、大学生の社会観の形成要因を検討することである。この課題は、大学生の社会観の個人間比較を行うものである。第三の課題は、大学生の社会観の形成過程を検討することである。この課題は、大学生の社会観の個人内過程を明らかにするものである。本研究では、以上の3つの課題を、青年期発達の一般性、時代的な特殊性、大学生個人の個別性という3つの視点から分析した。

1-2. 当該研究分野における位置づけ

本研究の研究は、発達心理学、特に青年心理学の領域の研究として位置づけられる。従来の日本の青年心理学においては、社会と個人の間を問う問題意識は存在していたものの、実証的に検討した研究は少なかった（下村・白井・川崎・若松・安達，2007）。社会と青年の間を問う研究が少ない背景には、社会が抽象的な概念であり（浦上，2008）、研究対象となりうる現象が見出しにくいこと（下村他，2007）や、青年自身が「社会体制」のような「大文字の社会」に対するリアリティを感じにくいこと（土井，2002）があると考えられる。しかし、青年が社会をどのようにとらえているかは、認知発達、自我発達、キャリア発達という青年期発達のさまざまな側面とかがかかわっている。青年の社会観を研究することで、青年の発達像に対して、新たな知見を付け加えられると考えられる。青年に対する支援を考えたり、青年の社会参加を促す要因を探ったりする上でも青年と社会の間を問う研究は重要であり（白井，2004）、青年心理学分野にとって貴重な資料を提示できる。

2. 論文の構成および概要

2-1. 論文の目次

はじめに

序章 現在の社会における青年

第1節 日本の青年を取り巻く社会状況の変化

第2節 大規模調査からみる青年の社会に対する意識

第1章 先行研究の概観と本研究の検討課題

第1節 発達の観点からみた青年と社会

第1項 認知能力の発達に伴う「社会」の範囲の拡大

第2項 拡大された「社会」のもとでの自我発達

第3項 成人期への移行における自己と社会の関係

第2節 社会観の関連概念の整理

第1項 日本における社会に対する認識を扱った心理学研究の変遷

第2項 社会に対する認識に関する概念の定義と研究対象

第3項 社会に対する認識の発達過程

第3節 社会観の形成にかかわる要因

第1項 発達の文脈主義における個人と環境の相互関係

第2項 社会に対する認識と個人内要因

第3項 社会に対する認識と環境的要因

第4節 大学生固有の文脈における発達と社会との関係

第1項 大学生固有の文脈

第2項 現在の社会で大学生に求められている資質・能力

第3項 現在の大学生の生活の過ごし方

第5節 本研究の検討課題と構成

第1項 先行研究の到達点

第2項 先行研究の問題点

第3項 本研究の課題・分析視点・方法・構成

第2章 大学生における社会観の特徴

第1節 文章完成法の記述にみる大学生の社会観の特徴

第1項 社会について思い浮かべること

第2項 自己と社会との関係に対する認識

第2節 自由記述にみる大学生の社会観の特徴

第3節 社会観尺度の作成

第1項 社会観尺度の作成

第2項 社会観の属性差の検討

第3項 第3節のまとめ

第4節 第2章のまとめ

第3章 個人特性の違いによる社会観の差異

第1節 自尊感情が社会観に与える影響

第2節 パーソナリティ特性が社会観に与える影響

第3節 批判的思考態度が社会観に与える影響

第4節 第3章のまとめ

第4章 対他関係に対する意識の違いによる社会観の差異

第1節 統制感が社会観に与える影響

第2節 社会のなかで生きていくことに対する効力感のタイプによる社会観の差異

第1項 社会のなかで自分が生きていけると思う理由

第2項 社会に対する自己効力感のタイプによる社会観の差異

第3項 第2節のまとめ

第3節 自己および他者に対する信頼感が社会観に与える影響

第4節 第4章のまとめ

第5章 生活の過ごし方の違いによる社会観の差異

第1節 家庭の文化的環境の違いによる社会観の差異

第2節 大学生活における時間の使い方のタイプによる社会観の差異

第3節 社会を知る際の情報源の違いによる社会観の差異

第1項 メディアへの接触頻度が社会観に与える影響

第2項 大学生が社会を知る際に主に利用している情報源

第3項 第3節のまとめ

第4節 第5章のまとめ

第6章 大学入学前後の社会観の変化

第1節 面接調査の分析方法

第2節 予備調査

第3節 本調査

第4節 第6章のまとめ

第7章 総合考察

第1節 本研究で得られた知見

第2節 成果と討論

第3節 本研究の限界と今後の課題

結論

引用文献

謝辞

付録

2-2. 各章の概要

序章 現在の社会における青年

序章では、現在の青年が生活している社会の状況と、現在の青年の社会に対する意識を踏まえて、青年の社会観の特徴や形成要因を明らかにする研究の必要性を示した。第1節では、本研究の調査対象者が生まれた1990年前後から2010年代半ばまでの社会状況を概観し、現在の青年・大学生がどのような社会で生活してきたのかを整理した。現在の日本の大学生は、政治的にはイデオロギー的な枠組みが認識しにくく、経済的には長期不況であり、災害や国際情勢などによって生活や生命が脅かされる不安が増している時代を生活していることが示された。第2節では、青年を対象にした大規模調査のデータをもとに、現在の青年が社会に対してどのような意識をもっているのかを把握した。その結果、現在の日

本の青年は、(1)歴史や文化、科学技術、治安のよさを日本の良さとしてとらえている、(2)就職状況の厳しさや真面目に行動する人が報われていないことを日本の問題ととらえている、(3)社会への満足度は低い、(4)政治への関心や社会関与への意欲は決して低くないという傾向が示された。

第1章 先行研究の概観と本研究の検討課題

第1章では、先行研究の到達点と課題を整理するために、先行研究を概観した。その上で、本研究の検討課題、研究手法、構成を示した。第1節では、発達の観点から青年と社会との関係を論じた。第1節では、先行研究の論を整理し、(1)認知能力の発達によって、青年期にはより抽象度の高い概念や社会事象、抽象的な他者を認識することができるようになること、(2)青年期の自我発達には、身近な他者を越えたより大きな社会の影響が大きくなること、(3)進路選択のようなキャリア発達においては、社会のなかにいる自分を意識したり、社会の厳しさを知ったりすることを示した。第2節では、社会観の関連概念を整理した。まず、1950年以降から2018年現在までの日本の心理学における社会に対する認識の研究を概観し、各年代で取り上げられているテーマや対象がそのときどきの政治や経済の状況、公害や自然災害などに左右されながら変化していることを示した。次に、社会的態度や社会認識、社会関与といった従来の研究で扱われてきた社会に対する認識の概念を整理した。これらの概念を用いた研究からは、青年期には児童期までと比べて社会事象の法則性や抽象度の高い概念を理解できるようになることや、社会をより否定的にとらえる傾向があることが示された。第3節では、社会観の形成にかかわる要因を整理した。まず、人間発達においては、「家族をはじめとして、地理的、歴史的、政治的、社会・文化的環境を含む重層的な構造」(小林, 2004)を考慮する必要があるという発達の文脈主義の理論を紹介した。次に、社会観の形成にかかわる要因として、自己評価やパーソナリティ特性などの個人内要因、家庭生活や対人関係などの環境要因を整理した。第4節では、大学固有の文脈、現在の大学生に求められている能力、大学生活の実態を整理し、本研究で大学生を対象とする理由を述べた。第5節では、先行研究の到達点と問題点を提示した上で、本研究の検討課題、調査対象者、調査方法、章構成を示した。先行研究の不十分な点として、「社会をどのように見ているか」という観点からの検討と社会に対する認識の形成過程の検討が不足している点を挙げた。先行研究の問題点を克服するために、本研究では、社会観という概念を提唱し、大学生における社会観の特徴、形成要因、形成過程を明らかにすることを目的とすると述べた。

第2章 大学生における社会観の特徴

第2章の課題は、社会観の特徴を明らかにすることであった。第1節では、文章完成法を用いて、大学生が社会としてとらえている事象や社会と自分とのかかわりという点から、大学生の社会観の特徴を検討した。第2節では、自由記述形式によって、大学生が現在の社会に対してどのように感じているかという点から、大学生の社会観の特徴を検討した。第3節では、序章や第1章で述べた問題意識と、第1節と第2節で明らかにされた大学生の社会観の特徴を踏まえて、妥当性と信頼性のある社会観尺度を作成した。「自己中心性・独善性に対する否定的評価」、「生活の安定性に対する肯定的評価」、「個人の努力の尊重」

という 3 因子 38 項目からなる社会観尺度が開発された。第 2 章からは、(1)大学生が思い浮かべる社会の側面がかなり多岐にわたっていること、(2)大学生が思い浮かべる社会の側面で特に意識されやすく、かつ問題視されているのが、社会のなかで生きている一般的他者の存在であること、(3)大学生は全体的に社会を否定的にとらえていること、(4)自分の行動によって社会が変わるととらえている学生と変わらないととらえている学生に二分されること、(5)否定的なイメージの社会に対する個々の学生の反応は「何とかなる」という学生や「不安である」という学生など多様であるが、自分自身で何とかしなければならないととらえる学生が少なくないことが示された。

第 3 章 個人特性の違いによる社会観の差異

第 3 章の課題は、社会観形成における個人内要因を明らかにするために、大学生の個人特性と社会観との関係を検討することであった。第 1 節では、自尊感情が社会観に与える影響を検討した。その結果、自尊感情の高さが全体的に肯定的な社会観につながるということが明らかにされた。第 2 節では、パーソナリティ特性が社会観に与える影響を検討した。その結果、外向性、誠実性、調和性の高さは全体的に肯定的な社会観につながることを示された。一方で、開放性の高さは全体的に否定的な社会観につながることを示された。情緒不安定性の高さは社会のなかで生きている人々やメディアに対する否定的評価に正の影響を与える一方で、治安のよさや便利さという社会の肯定的側面に対する評価にも正の影響を与えることが示された。第 3 節では、批判的思考態度が社会観に与える影響を検討した。その結果、物事を論理的にとらえているという自覚の程度が高いと、治安や物質的豊かさという側面を否定的にとらえる傾向がある一方で、努力が報われる社会だという評価につながることを示唆された。多様な考えや話題に関心をもつ程度が高いと、社会で生きている人々やメディアなどに対して否定的な評価をする一方で、治安や物質的豊かさという側面を肯定的にとらえることが示された。物事を客観的にみようとすることは、治安や物質的豊かさという側面を肯定的にとらえることが示された。物事を判断する際に証拠を重視する態度は、社会に対して批判的な見方をするにつながることを示唆された。第 3 章全体では、各個人特性が社会観に影響を与えることが示された。特に、自尊感情の高さが社会観に与える影響が大きいことが明らかにされた。

第 4 章 対他関係に対する意識の違いによる社会観の差異

第 4 章の課題は、対他関係要因が社会観の形成に与える影響を明らかにするために、社会に働きかけることや他者に対する認識と社会観の関係を検討した。第 1 節では、統制感（ローカス・オブ・コントロール）を取り上げ、社会観の関係を検討した。その結果、自分の人生を自分でコントロールできるという内的統制の高さが、「個人の努力の尊重」に正の影響を与えることが示された。第 2 節では、社会のなかで生きていくことに対する効力感を取り上げて、社会観との関係を検討した。「社会のなかで自分はやっていける」と感じる理由をたずねる質的検討と、社会に対する自己効力感の項目を用いた量的検討を行った。その結果、大学生が「今の日本社会のなかでまあまあやっていける」と感じる主な理由として、コミュニケーション能力、友人や家族の存在、過去の経験、衣食住などの生活状況があることが明らかにされた。逆に、「今の日本社会のなかでまあまあやっていける」と感

じない理由としては、主に自分の未熟さや能力不足という個人的要因と、就職難という社会的状況が挙げられる傾向があることが明らかにされた。社会に対する自己効力感が高いほど肯定的な社会観をもつ傾向があることが明らかにされた。ただし、社会に対する自分なりの考えや知識をもっているという面の自己効力感が高くとも、社会に対する無力感を抱いている場合には、社会を肯定的に評価する程度が他のタイプの学生とあまり変わらないことが示された。第 3 節では、自己および他者に対する信頼感が社会観に与える影響を検討した。その結果、自己や他者に対する信頼感の高さは全体的に肯定的な社会観につながり、不信感是否定的な社会観につながることが明らかにされた。ただし、他者への信頼感、「自己中心性・独善性に対する否定的評価」に正の影響を与えていた。

第 5 章 生活の過ごし方の違いによる社会観の差異

第 5 章の課題は、大学生の生活の過ごし方と社会観との関係を検討することによって、客観的な行動という面から社会観の形成要因を探ることであった。第 1 節では、家庭の文化的環境によって社会観に差異がみられるのかどうかを検討した。その結果、家庭の文化的環境が豊かであると感じているほど、肯定的な社会観をもつことが明らかにされた。第 2 節では、大学生活の過ごし方によって社会観に差異がみられるのかどうかを検討した。その結果、ゲームや読書により多くの時間を費やすタイプの学生は、それらの活動に相対的に時間を費やしていないタイプの学生よりも、「個人の努力の尊重」の得点が有意に低いことが示された。第 3 節では、社会を知る際の情報源の違いによって社会観に差異がみられるのかどうかを検討した。その結果、インターネットへの接触頻度の多さが、「生活の安定性に対する肯定的評価」に正の影響を与えることが明らかにされた。しかし、説明率は低く、社会について知る際の情報源と社会観の関係をたずねる方法には再考が必要であることが示された。

第 6 章 大学入学前後の社会観の変化

第 6 章の課題は、大学生が、日常生活のなかで社会観を形成・変化させていく過程を明らかにすることであった。第 1 節では、面接調査の分析方法を示した。第 2 節では、予備調査の結果を示した。第 3 節では、本調査の結果を示した。第 6 章からは、(1)大学入学前には、家族の話やテレビや新聞などのマスメディアなどから得た社会の知識を中心に社会観が形成されていること、(2)大学入学後には、社会観の形成にかかわる要因が増加し、家族や従来型のマスメディアからの知識だけではなく、学業、インターネットや SNS、アルバイト、一人暮らし、就職活動などを通して、社会についての知識を獲得していること、(3)(2)によって、大学入学後には、社会の現状だけではなく背景を知ったり、実体験として社会の知識を獲得したり、多様な人々の存在を知ったりすることが増加すること、(4)大学入学後に増加した要因によって、大学生の社会観は漠然としたものから具体的なものになること、また、社会をより多様な視点からとらえられるようになることが明らかにされた。

第 7 章 総合考察

第 7 章では、本研究から得られた知見を整理し、総合的な考察を行った。第 1 節では、第 2 章から第 6 章までの実証研究の結果から得られた知見を整理した。第 2 節では、第 1

節で整理した知見を、序章で述べた現在の社会状況や青年の意識、第 1 章で取り上げた先行研究の実証結果や理論に照らしながら、本研究の成果を議論した。第 3 節では、本研究の限界と今後の課題を述べた。本研究の 3 つの課題を総合すると、以下の点が示された。第 5 章で検討された家庭の文化的環境の豊かさや家族や友人など身近な他者との交流、過去の成功体験は、第 3 章で検討された自尊感情や第 4 章で検討された自己および他者への信頼感を育み、第 2 章で示されたような「生活の安定性に対する肯定的評価」や「個人の努力の尊重」へと結びつく。大学生活で培われた批判的思考や社会に対する知識の増加は、「自己中心性・独善性に対する否定的評価」に示されるような否定的な社会観につながる。大学生活独自の要因によって、大学生の社会観は、漠然としたものから具体的なものへ、狭いものからより多様で広いものへと変化していく。

3 つの分析視点との関係でみると、以下の点が示された。青年期発達的一般性という観点からは、大学生がとらえられる社会が拡大すること、社会に対して否定的な傾向をもつこと、大学生活を通して社会観が具体的になることが示された。時代的な特殊性という観点からは、現在の大学生が社会の制度的側面よりも一般的な他者やマスメディアといった面を意識しやすいこと、自分自身の力で何とか乗り越えようとする学生が少なくないことが示された。個性性という観点からは、否定的な社会に対して「何とかなる」ととらえる学生と「不安である」ととらえる学生がいること、「個人の努力の尊重」に対しては肯定する者と否定する者とがあり、その理由は個々の学生によって違いがみられることが示された。現在の大学生の社会観は、青年期における認知発達的一般性という土台の上に、「自己責任」「自助努力」が強調される社会という時代的な特殊性が反映され、家庭や学校生活で育まれた個々人の自己や他者に対する認識が影響を与えるという枠組みで形成されていくことが示唆された。

3. 論文の独自性

本研究の独自性は 3 点ある。第一に、社会観という概念を提唱し、「個人が社会をどのように見ているか」という観点から社会に対する認識を明らかにしている点である。従来の研究では、価値的態度を表す社会的態度、社会的概念の理解の発達を検討している社会認識、社会的活動への参加を表す社会関与といった概念が検討されてきた。しかし、これらの概念を扱った研究では、(1)社会が所与のものとして扱われており、青年が何を社会としてとらえているか把握しにくい、(2)社会的望ましさや概念理解の正確性にとらわれやすい、(3)社会に対する知識や関心の程度に左右されやすい、といった問題点があった。社会観という概念を用いて検討することによって、(1)大学生が社会としてとらえているものは多様であること、(2)従来の研究で主に検討されてきた政治や経済などの制度的側面よりも、現在の大学生は一般的他者やマスメディアといった側面を意識しやすいことを明らかにすることができた。

第二に、青年期の発達、時代的な背景、個々の大学生という視点から研究結果を分析している点である。従来の研究 (e.g. 白井, 1990 ; 百合草, 1981) と同様、本研究でも青年は社会を否定的にとらえる傾向があることが示された。この結果は、認知能力が発達することによって社会を批判的にみることが可能になるという、青年期発達的一般性としてとらえられる。しかし、何を否定的にとらえているかは、現在の社会状況という時代的な特

殊性が反映されていると考えられる。本研究で得られた知見から、現在の大学生における社会観は、特に、「一般的な他者」と「努力が報われる」という2つのキーワードによって特徴づけられるといえる。現在の大学生が社会をとらえるときに、自分自身の努力が報われるのか、努力した人が報われているのか、努力していないのに得している自分勝手な人がいないか、といった点を意識しやすいと推測される。自分の力で何とか乗り越えなければならないという社会の風潮の下で、「何とかなる」という学生もいれば、「不安である」という学生もいるなど、個々の大学生によって反応が異なることも明らかにされた。本研究では、「自己責任」や「自助努力」が強調される現在の社会の風潮が、個々の大学生の社会観に影響を与えていることを示すことができた。

第三に、第二の点を大学生生活独自の要因とも関連づけて明らかにしている点である。従来の大学生を対象にした青年心理学研究では、ただ大学生に調査を行っているというだけの研究が多いとされてきた（奥田・山田，2005）。本研究では、大学生の社会観の形成に、大学での学びやアルバイト、サークル、一人暮らし、就職活動といった大学生生活独自の要因が大きく影響していることを示すことができた。

4. 今後の課題

本研究には、4つの限界がある。これらの限界を克服することが今後の課題である。第一の限界は、本研究が1時点の調査であり、厳密な意味での社会観の形成を明らかにできていないという点である。今後は大学入学当初から大学卒業直前までの社会観を縦断的にとらえる調査を行う必要がある。大学生活の独自性を明らかにするために、大学入学前や大学卒業後も視野に入れた実証研究を行う必要もある。

第二の限界は、調査対象者が偏っているという点である。本研究の対象者の多くは、東京都内にある4年制総合私立X大学に通う学生であった。大学生の社会観の特徴をより鮮明にするためにも、より多くの大学の学生や、中高生や働くなどして大学に通っていない青年や、成人期の人も対象者として調査をしていく必要がある。

第三の限界は、各章で取り上げた要因同士がどのようにからみ合って社会観に影響しているのかを検討できていないという点である。今後は、本研究で取り上げた要因同士がどのように関連して社会観に影響しているのかを総合的に検討していく必要がある。

第四の限界は、個人内における社会観の形成過程を描ききれていないという点である。本研究では複数の対象者の語りを総合して、大学生の社会観の形成過程を図式化した。今後は、対象者1人1人の形成過程を丁寧に追ひ、大学生の社会観の形成過程の多様性を示していく研究が求められる。